# 第3回 ボード線図(基本要素とその合成) 制御工学Ⅱ



ボード線図

- 一次進み、二次遅れ要素
- 一般的な要素
- 関数の合成

#### 対数演算に強くなる その1



■ ボード線図は対数で表示される。対数の演算則を思い出しておこう 対数の定義

> 任意の正の実数xに対して を満たす実数pが唯一定まる。このpを $p = log_a x$ と表し、pをxの対数、aを底、xは真数と呼ぶ。

$$\log_a \frac{1}{x} = -\log_a x = \log_{1/a} x$$

$$\log_a (xy) = \log_a x + \log_a y$$

$$\log_a x^p = p \log_a x$$

$$\log_a \frac{x}{y} = \log_a x - \log_a y$$

$$\log_a 1 = 0$$

#### 対数表現



- 横軸が対数圧縮されているため、同じ比率はおなじ間隔で与えられる 1:2と2:4, 4:8はおなじ間隔
- 周波数aとbの中間(対数尺での真ん中)は Jab である。 例えば1と10
- の中間は (1.10 ≠ 3.16 となる。また1と2では1.4である 1/3Octaveは √A であり、2の1/3Octaveは √2 = 1.2599 であるが実用では1.25が使われている。これはまた∜10 = 1.2589 でもある
- 傾きを示すとき等間隔を与える比率で表現するが、代表的なのが 10倍のデカード[dec]と2倍のオクターブ[Oct]で比率あたりの意味でパー・デカードとかパー・オクターブとか表現される

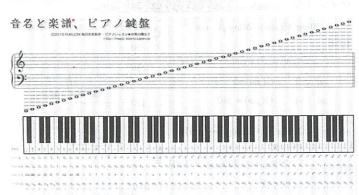
 $(1) \ \ (1.25)(1.58)(1.99)(2.51)(3.16)(3.98)(5.01)(6.31)(7.94)(10)$ 

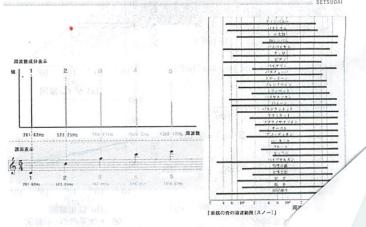
#### オクターブとは



#### 周波数で見ると







## ボード線図の読み方

#### ■ ボード線図では常用対数を使用し、単位はデシベルdBである。

常用対数:10を底とする対数

 $p = \log_{10} x \Leftrightarrow 10^p = x$ 

ですが、デシベルはこれを20倍して用いる。

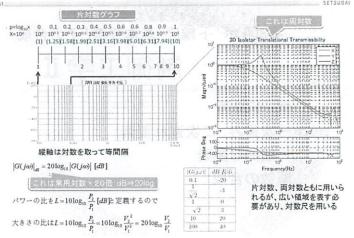
対数pはもともとベル、その10倍でデシベル。力のレベルは これでよいがパワーはx2となるため慣習として

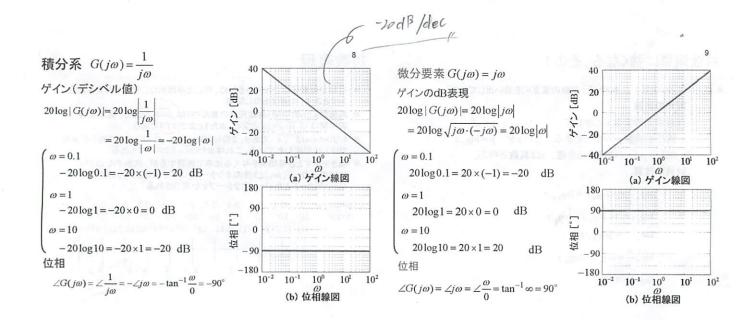
 $p = 10\log_{10} x^2 = 20\log_{10} x$ 

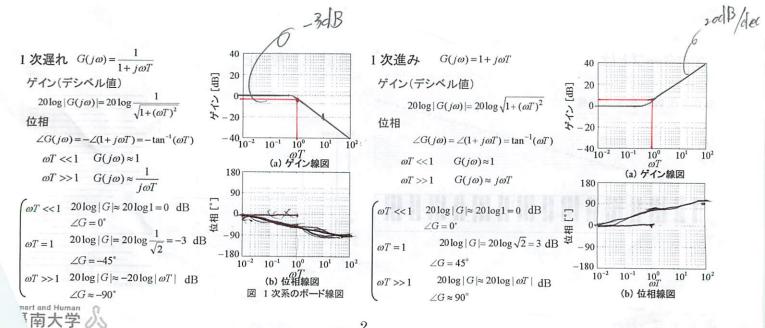
を用いることになっている。よってボード線図は

 $|G(j\omega)|_{dB} = 20\log_{10} |G(j\omega)| [dB]$ 

である。







0.01

= 0.5

-0.7

10-1

0.01

 $\zeta = 0.1$ 

10<sup>-2</sup> 10<sup>-1</sup>

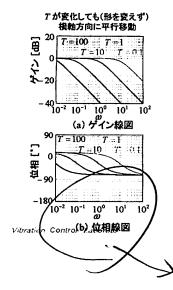
o 0/0 10 0 (a) ゲイン線図

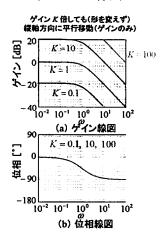
(b) 位相線図

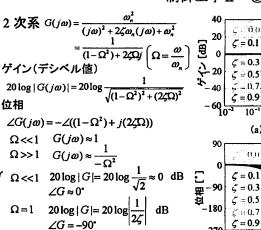
-180°

10<sup>2</sup> 101

種々の時定数・ゲインに対する1次系のボード線図







何かかまらかって (らしい)

# 基本要素のボード線図



 $\Omega >> 1$   $20\log |G| \approx -40\log |\Omega|$ 

∠G ≈ -180°

G(s)	ゲイン曲線	位相曲線
K	$dB \uparrow 20 \log  K $ $0 \longrightarrow \omega$	0°
S	$ \begin{array}{c c} dB & 1 & \omega \\ 0 & 20dB/dec \end{array} $	90°
$\frac{1}{s}$	dB 1 0 -20dB/Nec ω	0°
Ts+1	$dB \uparrow 20dB/dec$ $0 \downarrow 1/T \rightarrow \omega$	90° 0.2/T 5/T ω
$\frac{1}{Ts+1}$	$ \begin{array}{c c} dB & 1/T \\ 0 & -20dB/dsc \end{array} $	0.2/T 5/T \warphi
$\frac{\omega_n}{s^2 + 2\zeta\omega_n s + \omega_n^2}$	$dB$ $\omega_n$ $\omega$	$0^{\circ} \xrightarrow{\omega_{n}} \omega$ $-180^{\circ}$

#### 伝達関数の合成

■ゲインや位相の性質を用いると、一般的な伝達関数の ボード線図も一次遅れ要素や二次遅れ要素といった典型 的な伝達関数のボード線図をグラフ上で反転させたり、加 え合わせたりすることによって容易に得ることができる。

性質(1): H(s)=1/G(s)のときに次の式が成り立つ 10 (m. H(jw)) = -20 (0gn/q(jw)) (H(jw)= 49 (jw) 性質(2):  $H(s) = G_1(s)G_2(s)$ のときに次の式が成り立つ 20 logno / H(jw) | = 20 (gno | 61(jco) ) + 20 log of 20 ( 41/ju) = LG (JW) + LG2 (JW)

性質(1)は微分要素と積分要素の関係と同じく、ゲイン線図では 0[dB]で上下を反転させ、位相線図では0[deg]で上下を反転させ ることによって得られる。性質(2)ではそれぞれ加算すればよい。

### 2 重積分系

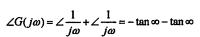
 $G(j\omega) = \frac{1}{(j\omega)^2}$ 

ゲイン(デシベル値)

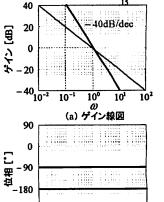
$$20\log\frac{1}{|(j\omega)^2|} = 20\log\frac{1}{\omega^2}$$

=  $-40\log|\omega|$ 

位相



 $=-180^{\circ}$ Vibration Control Laborato



*の* (b) 位相線図 積分系のボード線図

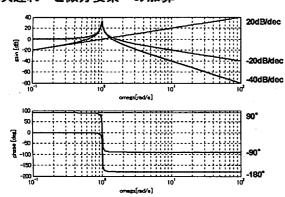
101

10-1 10°

#### 要素の加算

#### まとめ

■二次遅れ一と微分要素一の加算

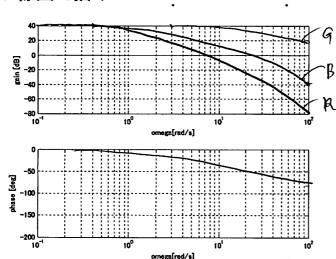


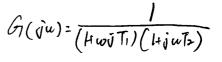
- ■対数スケールによる表現の優位さ。
- ■ボード線図の表し方:ゲイン線図と位相線図について学 んだ。
- ■基本要素のボード線図について、ゲイン特性、位相特性 の特徴、特にlogスケール表現で新たに得られる情報を
- ■一般的な伝達要素も基本要素の加算で求められる。

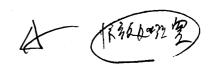
# 演習



■時定数T=1とT=0.1の一次遅れ要素の重ね合わせを ボード線図で描け





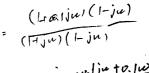


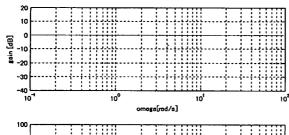
# 演習

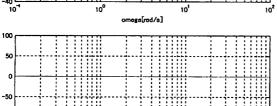


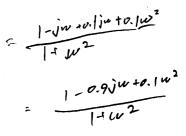
■時定数T<sub>1</sub>=1とT<sub>2</sub>=0.1の一次遅れ、進み要素の重ね 合わせをボード線図で描け

周波数伝達関数は
$$G(j\omega) = \frac{(1+j\omega T_2)}{(1+j\omega T_1)} = \frac{(1+0.1j\omega)}{(1+j\omega)}$$
 (ロタン) (ロ









[gob] estric